

P-122

親の養育態度と大学生の自己効力感に関する研究

林田 りか

長崎県立大学 看護栄養学部 看護学科

【目的】日本では、出生数が年々減少し、家庭環境も大きく変化している。先行研究によると、母親のあたたかい養育態度は学童期にある子どもの抑うつ傾向の低さと関連することが示されている。また、過保護・過干渉な親子関係が子どもの脅迫的心性と関連していることが明らかになっている。そこで本研究では、大学生の自己効力感と出生順位、きょうだい構成、学童期の親の養育態度との関連を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】A大学に在学中の1年生259名を対象に、対象者の基本的属性、家庭環境、親の養育態度尺度および特性的自己効力感尺度などを含めたアンケート調査を行った。調査期間は2019年7月である。調査方法は、研究の目的と倫理的配慮について説明した後、調査票を配布し、記入後にその場で回収した。倫理的配慮として回答は無記名自記式とし、調査への参加は自由意思であり回答や内容によって不利益を被らないこと、データは研究以外に使用せず、研究終了後には処分することなどを口頭および書面にて説明した。

【結果および考察】回収数は213名、有効回答数は188名（回答率88.3%）であった。女性が81.9%と多く、きょうだい有は173名（92.0%）、そのうち2-3人きょうだいが8割以上を占めていた。出生順位は1番目が43.4%、学童期に育ててくれた家族は母親が90.4%と最も多かった。基本的属性と自己効力感との関係では、きょうだい順位で1番目の方が2番目以降と比較して自己効力感得点が高かった（ $p=0.013$ ）。これは、きょうだい間の経験の差が自己効力感に影響しているからだと考えられる。基本的属性と親の養育態度との関係では、男性の方が女性に比べて親の養育態度尺度の下位項目である「統制的かかわり」「責任回避的かかわり」の得点は高く（ $p=0.004$ 、 $p=0.018$ ）、「受容的・子ども中心的かかわり」得点は低かった（ $p=0.001$ ）。親の養育態度を2群に分けて比較した結果、「統制的かかわり」低群の方が高群より自己効力感、「受容的・子ども中心的かかわり」、「責任回避的かかわり」において得点が高かった（ $p=0.011$ 、 $p<0.001$ 、 $p=0.035$ ）。学童期に親が決めたことを行い、自分で決めた経験が少ない者は自己効力感が低くなる可能性がある。自己効力感と過去の経験との関連は多岐にわたるため、具体的な影響をさらに調査していく必要がある。

P-123

LC-R 言語・コミュニケーション発達スケールの「じゃんけん」「推論」課題の5歳児健診への応用について

田中 杏花¹⁾、橋本 創一²⁾、小柳 菜穂³⁾、岡本 茉桜³⁾、石川 卓磨³⁾、秋山千枝子⁴⁾

¹⁾東京学芸大学大学院 教育学研究科 教育支援協働実践開発専攻 臨床心理学プログラム、²⁾東京学芸大学 特別支援教育・教育臨床サポートセンター、³⁾東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科、⁴⁾あきやま子どもクリニック

【問題と目的】5歳児健診において精神や言語の発達状況を見るために、総合的な言語発達検査LC-Rの課題が応用可能であると考えられる。例えば、5歳児健診マニュアル（日本小児科医会、2024）に規定されている精神・神経発達に関する問診項目のうち、「じゃんけんの勝ち負けがわかりますか」にはLC-Rの課題54「じゃんけんのルールの説明」が、「言葉で自分の要求や気持ちを表し、会話をすることがうまくできますか」にはLC-Rの課題46「推論」が該当する。本研究はこの2課題の典型口述例や間違いパターンを検証することで、5歳児健診での応用について検討する。

【方法】2～6歳の定型発達児124名にLC-Rを実施した。そのうち、課題54・46への自由回答の内容を取り出し、質的な分析の対象とした。

【結果】課題54の下位項目3問での平均正答率は、3歳5.3%、4歳30.8%、5歳47.6%、6歳58.3%であった（2歳は回答なし）。どうやって勝ち負けが決まるかの質問に対し、3,4歳では「チョキ」という一語文と「チョキが勝つ」という説明不足の回答が目立つ（3歳33.3%、4歳23.1%）。しかし5歳になると、「チョキにはグーが勝つ」と組み合わせを例に出して言葉で説明できるようになった（4歳19.2%、5歳56.3%、6歳75.0%）。課題46の下位項目4問での平均正答率は、2歳25.0%、3歳46.6%、4歳71.7%、5歳80.0%、6歳91.4%であった。急に雨が降ったらどうするかの質問に対し、2,3歳では「かさ」という一語文が目立つ（2歳33.3%、3歳21.4%）が、3歳で「かさをさす」という正答が半数となり、4歳以降の正答は「おうちに帰る」「部屋に戻る」など多様になった。また、おなかがすいたらどうするかの質問に対しては、2歳でも「ごはんを食べる」と正答できる割合は高く（66.6%）、その後も安定的に高い。「ごはんを作ってもらう」と人に助けを求める回答は4歳頃に見られた（13.8%）。誤答は全体的に少ないが、その内容としては「ごはん」という一語文や「帰る」という説明不足であった。

【考察】5歳児健診の問診項目に該当するLC-Rの課題について、一語文や説明不足による誤答から、徐々に様々な言葉での説明により正答できるようになるという発達的変化が見出された。子どものつまずきの内容が本研究の誤答の内容と一致する場合には“発達に遅れがある”と言える、というように、発達に心配のある子どもたちのスクリーニングとして本研究の回答例を参考にできる可能性が示唆される。